

令和4年度 一般入学試験 A

国語

試験時間 50分

[受 験 上 の 注 意]

- (1) 受験生は試験開始20分前までに指定された席に着席してください。
- (2) 受験票は、机上の番号のところに提示してください。
- (3) 筆記用具は、鉛筆、消しゴム以外の使用を認めません。
- (4) 試験開始後、20分を経過した者は当日すべての受験を認めません。
(公共交通機関の運休・遅延等による正当な事由によるものを除く)
- (5) 試験途中の退場は認めません。
- (6) 試験会場においては、すべて試験監督の指示に従ってください。
- (7) 試験の開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- (8) 問題冊子について印刷不鮮明、ページの脱落、解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、試験監督に申し出てください。
- (9) 試験中、体調が悪くなった場合は、試験監督に申し出て、その指示に従ってください。

身 延 山 大 学

I 次の文章を読み、設問に答えなさい。

デカルト（一五九六―一六五〇）はイエズス会経営のラフレーシュ学院で、その当時としては最高の教育を受けたが、数学を除いては、他の全てに失望した。他の全ての学問が基礎のしっかりしない「1」で、説得力を欠いているように、思えたからである。そこで、かれは書物の学問を捨て、世間という広い場所で、経験から真理を学ぼうと、旅に出た。かれは、あらゆる先入観念を捨てて、ゼロから出発し、自力で絶対に疑うことのできない真理を発見し、そこから学問を再構築しようとしたのである。そして、オランダの炉部屋での思索から、近世哲学の父、あるいは、哲学なる営みの父としてのデカルトが誕生する。それは、いかなる思索か。

絶対に疑うことのできない真理を発見するためには、疑うことのできるものは全て疑わなければならない。では、われわれにとって最も自明の真実を提供するようになると思われる感覚的経験はどうか。感覚的経験がわれわれを欺く例には限りがない。「2」「太陽は輝く丸い小さな点に見えるが、真実には、巨大な燃えるガス球である。遠くからは緑（ア）シタタる泉が存在すると見えたのに、近づけば、炎熱の砂地に立ち上る陽炎であった。「3」「われわれは時にもう死んだはずの昔の友に出会ったりするが、覚めてみれば夢であった。それなら、今ここで経験している現実が全て夢ではないという確証がどこにあるか。こうして、一度でもわれわれを騙したものは絶対的真理ではないという原則に基づいて、デカルトは感覚的経験の一切を真理から外した。

しかし、数学的真理はどうだろうか。たとえば、 $3 + 4 = 7$ を誰が疑いうるであろうか。ところが、ここで、デカルトは（イ）トボウもない仮定を立てる。神は全能であるから、天地万物がことごとく存在しないのに、それを存在するとわれわれに思い込ませることができはずだ。「4」「数学的真理も成立していないのに、それをわれわれに絶対的真理だと思込ませているのかもしれない。これが、悪意ある霊（malin génie）という仮定による懐疑であり、誇張的懐疑といわれる懐疑である。

「 Z 」

この思考はそのままカントに引き継がれ、カントにおいては、理性としての自己がもつ純粹悟性概念が外的世界を形成する形相的枠組みとなる。カントは、外的世界の秩序は外的世界がそれ自体としてもつ客観的秩序ではなく、理性としての自己が外的世界に与える秩序であるとし、この思

考の逆転を「コペルニクスの転回」と称した。しかしカントによる、(ウ)この根拠の逆転は、すでにデカルトの方法的懐疑によって遂行された根拠の逆転の続行に他ならなかったのである。

岩田靖夫『いま哲学とはなにか』岩波書店（一部改変）

問一 傍線部(ア)(イ)について、カタカナを漢字に改め、解答欄に記しなさい。

問二 空欄「1」に入ることわざとして最も適当なものを次の中から選び、番号を解答欄に記しなさい。

- ①後の祭り ②嘘から出た実 ③元の木阿弥 ④風前の灯火 ⑤砂上の楼閣

問三 空欄「2」から「4」に入る接続詞として最も適当なものを次の中から選び、番号を解答欄に記しなさい。

- ①それなら ②こうして ③しかし ④あるいは ⑤一方
⑥ところで ⑦たとえば ⑧つまり ⑨ただし

問四 空欄「Z」には、次のAからEの五つの文章が入る。正しい順序に並び替え、記号を解答欄に記しなさい。

(A) この場合、よく為される批判に、「われ歩く、故に、われ在り」でも、「われ食べる、故に、われ在り」でも同じではないか、という批判がある。しかし、それでは駄目なのだ。そういう批判はデカルトの真意を理解していない。なぜなら、天地が存在することさえ妄想かもしれないのだから、歩かない私、食えない私、総じて、身体のない私を想像することなどは、朝飯前だからである。そういう懷疑の中にはなんの自己矛盾もない。

(B) こうして、デカルトは絶対に疑うことのできない真理として「思惟する実体としての自己の存在」を確立した。ここから、デカルトは精神としての自己が持つ「無限」の観念を根拠にして、神の存在を証明し、存在の証明された神の誠実を根拠にして外界の存在を証明し、その形而上学を形成してゆく。

- ① ここでいう「方法的懐疑」とはどのようなものか、本文に即して百三十字以内で説明しなさい。
- ② 「根拠の逆転」とあるが、デカルトが絶対的真理としてあらゆる存在の根拠としたものは何か、六文字以内で解答欄に記しなさい。

Ⅱ 次の文章を読み、設問に答えなさい。

信春は三十三歳になり、絵仏師としてすでに一家をなしていた。日蓮宗に帰依し、寺におさめる仏画を専門に描くので、絵師ではなく絵仏師という特別な呼び方をされている。その力量は能登ばかりか越中や加賀でも高く評価され、有力な寺から引きもきらずに注文が舞い込んでくる。何不自由ない恵まれた「1」だが、信春は満足していなかった。このまま田舎の絵仏師で終りたくない。花鳥画や山水画にも筆をそめ、今をときめく狩野永徳と肩をならべるような絵師になりたい。そうした思いが胸の中にふつふつとたぎっている。しかも人間五十年といわれた時代である。残された時間はそう多くないと感じるだけに、焦りは日に日に高まっていた。

出港して半時ばかりたつと、波が急に荒くなり、船が激しく上下に揺れ始めた。

「どうやら外海に出たようだな」

武之丞が「2」に目をさまし、もう甲板に出ても良からうと立ち上がった。船は観音崎の北の小口瀬戸を抜け、富山湾に出たところだった。海は一面の灰色で、波がしぶきを上げている。北風が吹き付け身を切るような寒さだが、船底から解放された信春は胸を大きく開いて息を吸った。はるか遠くに立山連峰の尾根がづらなっている。向こうは雨がふっていないようで、雲間から射す陽光が尾根の雪を白く輝かせていた。船は北から流れ込む海流に乗って、能登半島ぞいに南に下っていく。船足は思いがけないほど速く、氷見から魚津へつづく海岸線がみるみる近付いてきた。

「やはり、越中へ向かうんですね」

信春の不安はさらに大きくなった。

「見ての通りだ。向こうに着けば、酒にも風呂にもありつける」

武之丞は前方をながめたまま、両手を突き上げてあくびをした。船は正午過ぎに岩瀬に着き、人足に引かれて神通川をさかのぼった。立山連峰を間近に見ながら五里ほど進み、笹津に着く。ここで塩を馬の背につけかえて飛騨街道を南に向かう。

これが飛騨、高山方面に海産物をはこぶ要路で、別名ぶり街道とも呼ばれていた。信春と武之丞は馬借の一行にまぎれて南へ向かった。すでに雨が上がり薄日がさしている。だが雪をいただいた山から吹き下ろす風は冷たく、信春は「3」をまとって寒さをしのぎながら歩きつづけた。

武之丞がどこへ行くこうとしているのか（ア）カイモク見当がつかない。この先は山ばかりなので、都に（イ）伝がある有力者がいるとも思えな

いが、武之丞にくどいと怒鳴られるのも(ウ)業腹なので何もたずねようとしなかった。

しばらく行くと川は急に狭くなり、両側の岸が鋭く切り立っていた。神通峽と呼ばれる難所で、道は絶壁の中腹をぬってつづいていた。

馬がようやく通れるほどの道幅しかなく、片側は断崖になっている。馬借たちは馬が足を踏みはずさないように鼻面をとって用心深く進んでいた。それでも(エ)転落事故が後をたたないようで、道の所々に愛馬の(オ)冥福を祈る馬頭観音が祀られている。それが後につづく者に危険を知らせる「4」の役目もはたしていた。信春は道から身を乗り出して下をのぞいてみた。崖は息を吞むほど高く、下に吸い込まれそうである。川は深い緑色にそまり、(カ)蛇行しながら流れている。

恐ろしさに身をすくめて後ずさりしていると、いきなり蓑を引っ張られ、後ろに倒れそうになった。

誰の(キ)仕業かとふり返ると、腹をへらした「5」が蓑の藁を引きちぎって食べようとしている。

安部龍太郎『等伯』文春文庫

(参考) 長谷川等伯(信春)(二五三九―一六一〇) 桃山時代に狩野永徳が率いる狩野派と対抗し、自ら「雪舟五代」を名乗り長谷川派の長として活躍した画家。

問一 空欄「 1 」に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、番号を解答欄に記しなさい。

- ①世界
- ②境遇
- ③状況
- ④段階
- ⑤環境

問二 空欄「 2 」に入る接尾語で最も適当なものを次の中から選び、番号を解答欄に記しなさい。

- ① 必然的
- ② 常識的
- ③ 反射的
- ④ 突発的
- ⑤ 偶発的

問三 空欄「 3 」に入る言葉として最も適当な言葉を本文中から抜き出し、解答欄に記しなさい。

問四 空欄「 4 」に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、番号を解答欄に記しなさい。

- ① 目的
- ② 道具
- ③ 目印
- ④ 標識
- ⑤ 記号

問五 空欄「 5 」に入る言葉として最も適当な言葉を本文中から抜き出し、解答欄に記しなさい。

問六 傍線部（ア）について、カタカナを漢字に改め、解答欄に記しなさい。

問七 傍線（イ）の意味として最も適当なものを次の中から選び、番号を解答欄に記しなさい。

- ① 知人
- ② 権力
- ③ 実力
- ④ 縁故
- ⑤ 関係

問八 傍線部（ウ）の意味として最も適当なものを次の中から選び、番号を解答欄に記しなさい。

- ① しゃくにさわること
- ② 大胆でものおじしいこと
- ③ 言うことと思っていること
- ④ 飲みにくいこと
- ⑤ 当然のこと

問九 傍線部（エ）について、その理由が本文中にいくつか記されている。その理由のひとつを本文中の言葉を用いて三十五字以内で記しなさい。

問十 傍線部（オ）（キ）について、漢字の読み方をそれぞれ解答欄に記しなさい。

問十一 傍線部（カ）蛇行の対義語として適当な言葉を漢字二字で解答欄に記しなさい。

問十二 信春はこの本文の後に京都に向かうことになるが、その理由が本文中にいくつか記されている。その理由を二つ、本文中の言葉を用いて、それぞれ二十五字以内で解答欄に記しなさい。